

日本数学会と日本学術会議
第23期日本学術会議第三部数理学委員会

委員長 坪井 俊

日本数学会は日本学術会議の重要な協力学術研究団体であり、今後も数学・数理学に関して、協働していくことになると思いますので、日本数学会の会員の皆様に日本学術会議について知っていただきたく、(私自身にとっても、これまでの日本数学会と日本学術会議の関わりを整理する必要があります、)この文章を書かせていただきます。

日本学術会議は、わが国の人文・社会科学、自然科学全分野の科学者の意見をまとめ、国内外に対して発信する日本の代表機関で、内閣府に置かれています。以下の2つの職務を行うこととされています。

- 科学に関する重要事項を審議し、その実現を図ること。
- 科学に関する研究の連絡を図り、その能率を向上させること。

<http://www.scj.go.jp/ja/scj/index.html>

2005年9月までは、日本学術会議は7部に分かれ、第4部が理学でした。第4部には数学研究連絡委員会が置かれ、第19期(2003年-2005年)においては、その25名の委員のうちの17名を日本数学会が推薦しています。このときは17名のうちの2名、上野健爾氏と岡本和夫氏は日本学術会議会員として推薦していました。会員は3年任期で3期9年まで再任も可というものでした。日本学術会議は、提言、報告等をまとめていますが、その主体は研究連絡委員会でした。

第20期(2005年10月-2008年9月)からは、日本学術会議は3部(人文科学、生命科学、理学及び工学)に分かれることとなり、第三部に分野別委員会として数理学委員会が置かれています。現在(2016年)、日本学術会議は210名の会員およびおよそ2000名の連携会員により構成されており、委員会の委員は原則として、会員または連携会員です。会員は3年任期を2期務め、半数が3年で交代する形になっています。会員、連携会員の選考は日本学術会議が自ら行なうことになりました。それにより第20期以降の会員の候補者を日本数学会から直接推薦することはなくなり、日本学術会議の会員に関する記事は、その後、日本数学会の会報(数学通信)には登場していません。

第20期以降の会員で数理学委員会の委員である方は、以下のようになっています。

第20期(2005年-2008年): 深谷賢治, 柏原正樹

第21期(2008年-2011年): 楠岡成雄, 柏原正樹, 石井志保子

第22期(2011年-2014年): 楠岡成雄, 森田康夫, 石井志保子

第23期(2014年-2017年): 坪井俊, 森田康夫(2015年まで),

小澤徹(2016年から), 小谷元子, 北川源一郎, 萩原一郎

日本学術会議の会員、連携会員は、<http://www.scj.go.jp/ja/scj/member/>,
<http://www.scj.go.jp/ja/scj/member/renkei.html>に掲載されています。会員、

連携会員は、選任された後に自分が所属する委員会や分科会を選ぶことになります。現在（2016年）、数理科学委員会には、数学分科会、数理統計学分科会、数学教育分科会、IMU分科会が設置されています。それぞれの委員および活動報告は、次のウェブページで見ることができます。

<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/bunya/sugaku/index.html>

これらのうち、IMU分科会は、国際数学連合（森重文会長（任期2015–2018））に対応する機関が日本学術会議となっているために設置されており、国際数学者会議などについて日本数学会と連携して活動しています。また、数理科学委員会は、日本学術会議が推薦する京都大学数理解析研究所の運営委員、専門委員の選考も行っています。

第21期日本学術会議第三部(理学・工学)は2010年4月に「理学・工学系学協会連絡協議会」を設置しました。この協議会には協力学術研究団体の主要な学協会が参加しており、現在(2016年)、数理科学委員会に関連して参加しているのは、日本数学会、日本応用数理学会、統計関連学会連合、日本数学教育学会、数学教育学会、日本OR学会です。2009年からの事業仕分けへの対応として、この協議会の参加メンバーのうちの日本数学会を含む14, 20, 26, 29, 30学会の声明がまとめられています。<http://mathsoc.jp/proclaim/>さらに、2011年8月には「理学・工学分野における科学・夢ロードマップ」をまとめています。日本学術会議に協力する学協会は男女共同参画学協会連絡会も組織しており、日本数学会は2002年の設立当初から参加していますが、2014年10月4日には、日本数学会が幹事学会となり「第12回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム」を開催しています。http://www.djrenrakukai.org/doc_pdf/2014/12th_sympto_report.pdf

さて、日本学術会議は、提言、報告の形で学術に関わる提案をしており、これが政策に生かされることを期待しています。

このような意味で、日本数学会とともに行ったシンポジウムには、以下のようなものがあります。

2004年12月23日–24日 研究集会「日本の数学者は今何を行うべきか？」（日本学術会議数学研究連絡会議，日本数学会）

<http://mathsoc.jp/meeting/sukenren200412/workshop2004dec.html>

2006年5月17日 日本学術会議シンポジウム「礎（いしずえ）の学問：数学—数学研究と諸科学・産業技術との連携—」（日本学術会議講堂にて，主催：（社）日本数学会，日本学術会議数学委員会；後援：文部科学省科学技術政策研究所）

<http://mathsoc.jp/meeting/ishizue2006/sympo20060517-rev.html>

数学通信第11巻第2号「日本学術会議シンポジウム「礎の学問：数学」」に報告
<http://mathsoc.jp/publication/tushin/index11-2.html>

2010年11月18日 日本学術会議公開シンポジウム「初等中等教育における理科・数学・技術教育 ～現状、課題及びその解決に向けて～」（日本学術会議講堂にて，主催：日本学術会議第三部 理科・数学・技術に関する初等中等教育検討分科会）

<http://www.scj.go.jp/ja/event/pdf/105-s-3-1.pdf>

2013年1月13日 日本学術会議公開シンポジウム「学士課程教育における数理科学分野の参照基準を考える」(日本学術会議講堂にて, 主催: 日本学術会議 数理科学委員会 数理科学分野の参照基準検討分科会; 共催: 日本数学会, 統計関連学会連合, 日本応用数理学会)

http://mathsoc.jp/meeting/sci_council201301/

2014年3月26日 日本学術会議公開シンポジウム「数理モデリング(数学と諸科学・産業との連携の観点から)」(日本学術会議講堂にて, 主催: 日本学術会議; 共催: 日本応用数理学会, 日本統計学会, 日本数学会)

<http://www.scj.go.jp/ja/event/pdf2/184-s-3-1.pdf>

数学通信第19巻第2号(2014年8月)にて報告

<http://mathsoc.jp/publication/tushin/1902/scj-hokoku.pdf>

2015年3月23日 日本数学会教育委員会主催教育シンポジウム「日本の算数・数学教育への提言に向けて」(明治大学での年会にて)

<http://mathsoc.jp/meeting/meiji15mar/kyoiku15mar.html>

2015年7月9日 日本学術会議公開シンポジウム「学士課程教育における統計学分野の参照基準を考える」(日本学術会議講堂にて, 主催: 日本学術会議数理科学委員会 統計学分野の参照基準検討分科会; 後援 統計関連学会連合, 日本数学会, 日本応用数理学会)

<http://www.scj.go.jp/ja/event/pdf2/213-s-3-1.pdf>

<http://mathsoc.jp/publication/tushin/1804/scj-symposium.pdf>

これらのシンポジウムは, 日本学術会議の提言, 報告に関連して開催されていることが多く, 数理科学に関しては以下の提言, 報告が出されています. そのpdfファイルは, <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/>に掲載されています. このディレクトリ一名を補ってアクセスしていただきたく存じます. これらの提言, 報告には, 委員会, 分科会独自の活動の成果も含まれています.

第19期第4部 報告「科学・技術を文化として見る気風を醸成するために」(2005年6月23日) kohyo-19-t1030-13.pdf

第19期第3部統計学研究連絡委員会 報告「知識創造社会に向けた統計教育の推進について」(2005年7月21日) kohyo-19-t1031-10.pdf

第20期第三部に関係する委員会 提言「新しい理工系大学院博士後期課程の構築に向けてー科学・技術を担うべき若い世代のためにー」(2008年8月28日) kohyo-20-t62-11.pdf

第20期数理科学委員会数理科学振興策検討分科会 提言「数理科学における研究と若手養成の現状と課題」(2008年8月28日) kohyo-20-t62-7.pdf

数学通信第13巻第4号(2009年2月) 深谷賢治「日本学術会議数理科学委員会数理科学振興策検討分科会の提言について」

<http://mathsoc.jp/publication/tushin/1304/scj-teigen.pdf>

第20期数理科学委員会数理統計学分科会 報告「数理科学分野における統計科学教育・研究の今日的役割とその推進の必要性」(2008年8月28日)

[kohyo-20-h62-3.pdf](http://mathsoc.jp/publication/tushin/1304/scj-teigen.pdf)

第21期第三部拡大役員会, 理学・工学系学協会連絡協議会 報告「理学・工学分野における科学・夢ロードマップ」(2011年8月24日)

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-21-h132.html>

(数理科学分野 [kohyo-21-h132-04.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-21-h132-04.pdf))

第22期数理科学委員会 数理科学分野の参照基準検討分科会 報告「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準」(2013年9月18日)

[kohyo-22-h130918.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-21-h132.html)

第22期日本学術会議 科学者委員会学術の大型研究計画検討分科会 提言「第22期学術の大型研究計画に関するマスタープラン(マスタープラン2014)」(2014年2月28日) [kohyo-22-t188-1.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-21-h132.html) (現在(2016年), これを改訂する作業を行っています)

第22期数理科学委員会数理統計学分科会 提言「ビッグデータ時代における統計科学教育・研究の推進について」(2014年8月20日) [kohyo-22-t197-1.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-21-h132.html)

第22期日本学術会議第三部 報告「理学・工学分野における科学・夢ロードマップ2014(夢ロードマップ2014)」(2014年9月19日)

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-22-h201.html> (数理科学分野の記述 [kohyo-22-h201-3-2-1.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-22-h201-3-2-1.pdf), [kohyo-22-h201-3-2-2.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-22-h201-3-2-2.pdf), [kohyo-22-h201-3-2-3.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-22-h201-3-2-3.pdf))

第23期数理科学委員会 統計学分野の参照基準検討分科会 報告「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準統計学分野」(2015年12月17日)

[kohyo-23-h151217.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-22-h201.html)

第23期数理科学委員会数学教育分科会 提言「初等中等教育における算数・数学教育の改善についての提言」(2016年5月19日) [kohyo-23-t228-4.pdf](http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-22-h201.html)

これ以外に, 数学通信第13巻第3号(2009年11月)に日本数学会と日本学術会議数理科学委員会が共同で訳した「IMU-ICIAM-IMS 報告 Citation Statistics」が掲載されています。

<http://mathsoc.jp/publication/tushin/1303/CitationStatisticsJP.pdf>

現在(2016年), 日本学術会議数理科学委員会数学分科会が取り組もうとしているこ

とは以下のことです。日本学術会議シンポジウム「礎（いしずえ）の学問：数学—数学研究と諸科学・産業技術との連携—」から10年たち、西浦廉政総括による「数学と諸分野の協働によるブレークスルーの探索」研究領域が大きな成果を挙げていますが、「数学と他分野科学・産業との連携」のさらなる発展のために、現在まとめられている第22期数理科学委員会数学分科会 記録「数学と他分野科学・産業との連携」（2014年9月1日）<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/kiroku/3-140901.pdf> をもとに、提言、報告をまとめることです。

以上、ほとんどがデータのご案内になってしまいましたが、日本学術会議の活動についてご承知いただき、今後とも日本数学会会員の皆様の日本学術会議の活動へのご協力をよろしくお願い致します。